魔法暦001年:The First Wizard

チャカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法暦００１年：Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｗｉｚａｒｄ

【Ｎコード】

Ｎ０１７１Ｆ

【作者名】

チャカ

【あらすじ】

これは世界初の魔法使いになった男の物語。

（前書き）

その男はまだ己の運命を知らなかった。

オレの名前は和原颯斗〔かずはらはやと〕。
今、オレは一世一代の大勝負に出ている。

「好きです！！つき合って下さい！！」

初めて彼女、柊美鈴〔ひいらぎみすず〕と会って約半年、夏真っ盛りの季節になってやっとの思いで伝えたオレの気持ちは

「ごめんなさい、私、好きな人がいるから…付き合えない」

たったそれだけの言葉で脆くも崩れ去った。

「やっぱり振られたな、」

傷心したオレの隣をケータイをいじりながら歩くこのメガネの名前は一ノ宮高臣〔いちのみやたかおみ〕、中学時代からの付き合いで、いわゆる腐れ縁というやつだ。

「テメェ…！友達が心に重大な傷を負ったと言うのに、その口の聞き方はなんだ！？オレを慰めろ！熱く抱き寄せ抱擁してくれ！」

「イヤだよ気持ち悪い。心の傷を慰めながら黙って歩け」

「うぅ～悪魔か貴様は…」

「ウルサい男だな。一回フられた位で何そんなに落ち込んでんだよ。いいか？足りない頭をフル回転させて聞けよ？地球には今現在で６０億人の人間が住んでてその半分以上が女だと言われてる！つまり男の方が少ないんだ。選びたい放題だ！」

そんな事力説されても伝わるかーと言う顔をすると高臣がオレの頭をヘッドロックして町ゆく女性達を指差す。

「あの女も！アイツも、アレも！選び放題だ！」

それぞれデブのヤマンバに、前髪で顔が見えない陰険と顔がブツブツのおできに支配されたヤツ。
軽く殺意が芽生える内容に加えヤマンバにいたってはコチラの話を聞いてたらしく、マジあり得ないんですけどー、と言って隣のヤマンバとグチグチ言う始末。

「高臣、オマエはブス専か？それともふざけてんのか？」

「敢えて言おうふざけていると」

「じゃ死ぬ」

こんなんじゃ元気なんか出るわけもなく高臣のヘッドロックから離脱したオレはトボトボと家路につく。

「なんだよワガママなヤツだな」

「やっぱさぁ、柊みたいなっつうか柊がいいだよね…〜」

「フられたんだろオマエ。この後オマエに残された選択は、また告白するかストーカーになるかぐらいしかないぞ？」

その時、偶然なのか必然なのか街頭テレビでやっていたのはメガネのアイツが魔法学校で箒に乗ったりチェスしたりする英国発の世界的大ヒット魔法ファンタジー小説の映画版。それを見てオレは閃いたのさ。

「そうだ、魔法使いになって柊の心を操ればいいんだ…」

「う〜ん、そういう手も…え？え？何言ってんの？」

高臣が二度見したくなる気持ちも分かるがこの時のオレは普通ではなかった。言わばトランス状態！既に神は降臨なされた！

「ウヒョヒョヒョヒョ〜！」

奇声を発しながら走るオレを見て高臣が他人のフリをしたのは言うまでもなかった。

「ウヒョヒョヒョヒョ検索だぁ～！！」

そのままのテンションで家に帰って早速魔法使いのなり方をそのままのテンションでパソコン検索！

するがろくなのが出てこない上に果ては手品の学校とか出てきて意味プーさん

ここでやっと神が帰られたのか正気に戻って突っ伏し

「オレは馬鹿か？」と、呟きながらネットを見てると少し興味を惹かれるタイトルがあった。

〔魔法使いのなり方、真伝〕

クリック、クリック、ダブルクリックで進むと、このサイトには今までのウソサイトよりよっぽどそれっぽい事が書いてあったので実践してみる事にした。

やり方は簡単。

宇宙からの来訪者、隕石を手に入れて、グツグツ煮込んで煮汁を飲むだけ。

簡単…じゃないなと数秒前の自分に突っ込みを入れながら庭に出てみる。

都会じゃないから星は見えるけど落ちては来ないわけで、でもとりあえず叫んでみる。

「星よ～！オレに力をおくれ～！！」

シーンと言う音が聞こえた気がした。
赤面した。
ふと気づくと妹がニヤニヤした目つきでオレを見て、パッと家に入って行った。
きっと長女と次女の所に行ったんだ。家に入ったらオレは何時まで続くか分からないイジられキャラに……

考えただけで恐ろしい、

だが腹ペコだったので家に入ろうとすると、突然耳をつんざくビブラート音が鳴り響く。

まさか…！？

と、ルパン三世を意識しながら振り向くと、ドン！！と地面を揺らす衝撃と共にそれは落ちてきた。

モクモクスモーク吐きながら我が家の庭に突き刺さる拳大の石。これは間違いなく…

「隕石だ……隕石だこれ！ウォーやったぁぁぁー神様お星様ありがとぉぉぉぉぉぉう！！」

嬉しさ爆発で家の中に入ると長女と次女が邪悪な笑みを、長女の後ろに隠れる妹は更に邪悪な笑みを浮かべている。

「星よ～オレに力をおくれ～（笑）だっけ？颯斗、アンタこんな季節に七夕気分かなんかなわけ～？」

「アンタがそんなバカだとは思わなかったわ～。そ～だ！アンタの願いが叶うようにお姉さんが短冊に書いたげるわよ」

「ねーさんそれ名案だわ！」

おもむろに近づいてくる二人の姉に恐怖を感じる事を禁じ得ないオレ。視線の先では妹が油性マジックを持っている。

「さぁ、脱いで」

「お、お姉さま方…何をなさるおつもりで…？」

「アナタのお願いが叶うように短冊を書くの。短冊は勿論アナタよ」

「い、いや～！！！」

星降る夜に響いた悲しい男の断末魔を聞いた者は意外に多かったらしい。

「ヒドい…ヒドい～…」

シクシクと泣くオレの腹には

「力を下さい」と書かれている。丁寧に文末にはハートまでいれて…

「なんか飽きちゃったわねーさん」

「それもそうね。思ったより汚いし。これじゃあ短冊って言うより笹ね。笹の葉」

「ホントだ笹の葉みたい。アンタ明日から笹の葉だから」

暇潰しにはなったなと出て行く鬼姉共。ここまでしといてこの仕打ち。なんと酷い待遇か、

「オレに人権は…？」

俺限定の無法地帯にソッコー出て行きたくなったが、弱り切ったオレの心は妹が去り際に言った

「笹の葉…」

の一言で本日二度目の大崩壊を迎えたのだった。

こうしてオレは家族から笹の葉と呼ばれる事と引き換えに隕石をゲットし、煮汁をかっ喰らって一週間腹痛て寝込んだ。

一週間後、

学校に赴いた下痢はダイエットになる事を体現したカカシの様なオレを高臣は若干の距離を置いて迎えてくれた。

「そんでオマエ馬鹿だから煮汁飲んだ訳？」

「ウン、ノンダ！」

「それを飲んで高校最後の年、一学期の大切な期末試験を病欠した訳か？」

「ウン、ノンダ！」

「オマエ何でカタコト？キモい。それなおるまで近寄るなよ。わかったか！？」

ビシッと人差し指を刺してきやがったが肝心な事を聞いてこない。

「オレが魔法使いになったか聞かないのかよ！？」

「なってたら自分の下痢治してただろ？つまりオマエはなりそこない！一般ピーポー、下痢損の人生棒に振り男だ！！わかったかアホ！大切な事だから二回言おう、このグズアホがぁ！」

「ひでぇ、ひでぇよ高ちゃん！オレがせっかく魔法使いになったのに…ヨヨヨ…」

「なら見せて見ろ。人生と引き換えに手に入れた魔法とやらを！」

「おうおうおう、特とごらんあれぇ～！」

瞬間、高臣は目を疑った。

友人和原颯斗の耳が…デッカくなっちゃた～……

「マギー審司のビックリデカ耳定価３７０円…じゃ、ダメ…？」

沈黙がオレを襲った。

１０年来の付き合いでもある一ノ宮高臣〔１８〕の顔から精気が抜けたかと思うとスッと机に向かい、古典の勉強をし始めた。

「バカは死ななきゃ治らない……」

高臣が呟いた言葉がグサッと胸に突き刺さった。

放課後、帰り道

「待ってくれよ～高臣～悪かったよ～」

「うるせぇ天然記念物アホが！オマエは上野動物園の檻にでも入ってパンダの横で笹食って一生出てくんな！！」

「おまっ…今のオレに笹と言うんじゃねぇ～！笹扱いされることの厳しさを知っているのかぁ～！？」

等とくだらない事をしてると、この町には珍しく人だかりができている。

なんぞ？なんぞ？と野次馬しに行くと、一件の家が火事になっていた。

消防車はまだ来てないらしいが既に物凄い勢いで炎は住宅を包み込んでいる。

野次馬根性丸出しで最前列にいくと見知ったおばちゃんが今にも突っ込んで行きそうな勢いで燃えてる家に向かって必死に名前を呼び続けていた。

聞き慣れた名前だった。

「美鈴、美鈴ー！！誰か…美鈴が、美鈴が中にぃ、」

燃えていたのは柊美鈴の家だ。

自然に体が動き始めていた。
柊を助ける為にオレは突っ込むと心が理解した瞬間に高臣に体を止められた。
「止めろ、助けに行ってもこんだけ燃えてたら意味ないぞ。もう死んでる。」
正論だと思う。
でも…
「でも、オレ、行く！柊助けに行くよ！」
「オマエ正気か！？あんな柱も燃え落ちそうな位燃えてんのに、せめて消防車が来るの待てよ！」
「ダメだ、今の時間は帰宅ラッシュだから多分まだ時間がかかる。そんなの待ってたら柊が本当に死んじまう…」
「敢えて聞こう颯斗、お前は今正気か？自棄か？」
「両方だ」
「颯斗、柊はオマエをフッたんたぞ？フられた女の為に死ぬ気か！？」
「あぁ、死んでもいい。死んでもオレは柊を助けに行く。確かにフられたけど、オレはまだ…柊のこと、好きだから」
きっとオレは今、とんでもなくバカな選択をしたのだろうと自分で

も分かる。分かるけど、これは理屈じゃないんだ。
好きになっちまったらもう一直線。この感情は理屈じゃない。

オレの目を見て、高臣はわかったと呟いた後、若いって恐いなと言うと、
「オレも一緒に行く！！」
と言ってくれた。
「ありがとぉぉぉぉぉ高臣ぃぃぃぃ～！！」
「あ～ひっつくんじゃねぇ！！早く行くぞ」

俺達はセオリー通り水を頭から被ると裏口から燃え盛る家の中に侵入を試みる。

まだ焼けてないドアを開けると、そこには火炎地獄が広がっていた。

この中のどこかに柊がいるはずだ。
背を低くして煙を吸わないようにしながら、持っていたハンカチを口に当てる。呼吸をする度、熱で喉が焼けそうになる。

「柊ー！どこにいるんだ柊ー？」
何回目からかは返事は帰ってこないとわかったが、それでも呼び続ける。必死に、ただ必死に

リビングや台所、自室にも柊の姿はない。
「ホントにいんのかー！？」
「いる、柊は絶対にいる！！」

絶対にいると何故か確証が持てた。何故か感が働く、ドンドン神経が集中していく。

トクン…トクン……トクン

心臓の音が聞こえる！！

「コッチだ！！」

階段を駆け上がり、一番奥の部屋の前、

「いた！！」

「柊、大丈夫か柊！？」

返事はないが、揺すられて小さな口元からケホッケホッと咳き込む音が聞こえた。

「よかった、生きてる…。生きてる！」

「早く脱出しよ颯斗！もう熱で靴底溶けかけてる、制服すすだらけの焦げだらけだ！」

「ああ！」

背負った柊の体は思ったより重かった。人の命は、こんなに重いんだ。

助けにきて良かった…。

それに…背中に柔らかい胸も当たって結構役得だ。

「なにバカ言ってんだ！！」

先導する高臣がオレの役得発言に振り向いた瞬間。メキメキと不吉な音と共に、まだ焼けてない柱が高臣の上に落ちてきた。

「高臣！！」

高臣の体にのしかかった柱を直ぐに起こそうとしたが、重くて1人じゃとても持ち上げられない。

「高臣、待ってろ！直ぐに上げるから」

ビクともしない柱に燃え上がる炎を見て俺が必死に頑張ってるのに高臣は爺さん見たに悟った顔して先に行けといった。

「このままじゃ、オマエも柊も死んじまう…ここはオレを置いて逃げるのが得策だ…」

「なにジジイみたに物分かりいいこと言ってんだバカ！オマエだけ死なせる訳にはいかねぇんだよ！！」

必死に、ただ必死に、いくら力を入れて、いくら踏ん張っても、その柱は持ち上がる事はなく、辺りを炎が囲んでいく。

「オマエは柊で手一杯だろ？オレの命まで拾おうなんてバカな事考えずに、は…や、く……」

糸が切れた人形のように動かなくなった高臣を見てオレは絶望に包まれた。

「イヤだ、イヤだ、死ぬな！死ぬなよ高臣！！高臣ー！！」

プツン

何かが切れて力が溢れるのを感じた。

「は、はー、はー」

自分でも何をやっているのか分からない。

だが右手をかざした柱は宙に浮いていた。

「なんだこりゃあ～！？」

一番始めに驚きの歓声を上げたのは死んだ筈の一ノ宮高臣だった。

普通は浮かせてるオレだろ。

つか生きてたよ。

「なんだよ！？なんなんだよ！？オマエ、どうやって浮かせてんだよ！？」

「そんなんオレにだってわか……あ…」

脳裏に甦ったのはあの隕石の煮汁。

「じゃあ、これ魔法…？」

「オレに聞くなよ、つか、それより早くその柱どっかに降ろせ！」

言われた通りに降ろしてみる。降ろせた。

やっぱり、魔法だと確信したオレは、ならと思い立ち、大声で叫ぶ。

「炎よ、消えろー！！」

すると、オレを中心にあれだけ轟々と燃え盛っていた炎が全て、一瞬のウチに、跡形もなく消し飛んだのだ。

「はは、オマエ、やっぱり…」

「魔法使い…かな？ハハハ…」

後日、

魔法使いになったオレの周りは急激に騒がしくなった。連日連夜押し寄せる報道陣に役人、学者に謎の団体に所属する怪しい人々。家から出れなくなっただけでなく誰が流したのかケータイの番号にメアドまでしられてケータイまで忙しなく働き続けている。

ピピピ　ピピピ

またケータイがなっとる。

相手は不明。こっちには登録されてない番号が鳴り続ける。

「うっせぇんだよ！誰だよテメェ！？」

怒鳴ったらどうにかなると言う急に優しくなった現金な姉共の進言通りに怒鳴ってみると、ケータイの向こうで聞き慣れた声がごめんなさいと呟いた。こ、この声、まさか…！？

「柊、さん…？」

「はい…」

まさかの電話相手に思わず正座してしまうのはオレが純日本人だからだ。

「入院したって聞いてたけど大丈夫？つか柊さんオレの電話番号知ってたんだ」

「今日退院して、一ノ宮君が電話番号教えてくれたの」

一ノ宮、なんてイカしたナイスガイなんだ。こんなに他人に感謝した事はない！グッジョブ！！

「あの、こないだの事でお礼いいたくて…ありがとう」

こんな、こんな幸せな言葉を聞けるなんて、マジ魔法マンセー！幸せ笑いが出そうなとこを必死に堪えて会話をつづける。

「いや、お礼なんて別に、オレが勝手にやった事だから」

「あの、ね…それでね、お礼の他にも言いたい事あって。こないだの告白の事…」

瞬間背筋がピンと張って頭の中を色んな妄想がグルグル回り始めた。付き合いたいとか、なんかもうそんな事か！？

恋愛経験の少ないオレにはもうそんな事しか頭にない。

「私、やっぱり和原君とは付き合えない。私、一ノ宮君が好きなの」

この瞬間を持ちましてオレの思考は一時停止。気づいた時には電話は切れて頬には涙の跡がつきまくっていた。
再び思考が回復した時にオレが真っ先に考えた事と言えば、初志の通り柊の心を操るという外道戦法だがそんな事をしても、そんな事で柊を振り向かせても意味がないと悟った。

まだゲームセットには早すぎる。オレは自力で柊を振り向かせてもみせるぜ。
「相手が高臣だろうとオレが柊の旦那になる！」
翌日とまどう高臣にとりあえず宣戦布告。この続きがどうなったかわまたの機会に。

とりあえず、
旧暦２００８年、９月９日。
世界で初めての魔法使いが誕生する。
翌年より隕石の煮汁で魔法能力に開花する者、またはもとから魔法能力を有する者が現れ始め、翌々年より世界は年号をかえた。

魔法暦０００１年

和原颯斗は記念すべき最初の１人、Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｗｉｚａｒｄとして歴史に名を刻んだ。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0171f/

魔法暦001年:The First Wizard

2011年1月18日02時42分発行